

「伝えたい」という願い

山形県光傳寺住職 庄司憲昭

何かを伝えたいという願いは、一体どこから生まれてくるのでしょうか？

この身体を両親にいただき、この心を出逢った事柄に授けていただいた私たち。

一見、「私のもの」と勘違いしてしまいそうなこの日常にこそ、答のヒントが隠されています。

ケイちゃんは、ご近所に住む女の子、昨年、保育園の年中さんになりました。新しい春を迎えたある日、彼女の曾祖父・ひいおじいちゃんが亡くなりました。

私は、ご葬儀の後、四十九日間のお参りにお邪魔しました。お経の途中で保育園行きのバスが迎えに来るために、ケイちゃんは、お出かけの身支度をして、一緒にお参りしてくれました。三・七日、四・七日と過ぎたころ、お家でいつもお迎えをしてくれたひいおばあちゃんが、私にこんな事を言いました。「うちのケイちゃん、七日のお参りの途中で、保育園へ行くのだけれど、帰って来ると、まず真っ先に、亡くなったおじいちゃんの祭壇の前に座るのよ。その時の拝み方が、朝の和尚さんの姿にそっくりで、本当に可愛らしい。」

線香の立て方、カネの鳴らし方、拝み方などを、私そっくりに真似ているというのです。そのおばあちゃんは、そう言うのですが、本当は、ケイちゃんが誰の真似をしていたのかを、私はちゃんと知っています。

それは、拝まれているおじいちゃんの、在りし日の姿です。亡くなったおじいちゃんというお方は、大変信心深く、どんなに忙しい日であっても、お仏壇にご飯をお供えし、お灯明を灯し、線香を立てて拝まなければ、仕事へ行かない方でした。そのお姿をケイちゃんは真似ていたのです。

今日の実践は、今は亡きお方の、在りし日の姿。拝む姿として受け継がれていたのです。

何気ない一日の行いに、伝えられたことを

見つけ出した時、私たちはそのことを、誰かに伝えたくくなります。「いただきました」ということを丁寧に伝えてゆきましょう。